

## 作品の中のアルビノ、そして私の思ったこと

鍼灸マッサージ師 高坂みさ子

### 石井更幸さま

心に残るお話をうかがえ、そして素敵な御夫婦と親しくお話しさせていただくことができ、先月 27 日は大変楽しい夜でした。ありがとうございました。

物語等の世界に描かれたアルビノのことを、少し書かせていただきます。

#### 方舟で有名なノア

バチカンには正式には認めていませんが、その容姿の描かれ方から、アルビノであったのではないかとされています。

人類が滅亡の危機に立たされたとき、地球上のあらゆる生命を生へと導かせた人間として神が選んだのがノアでした。それは何かの暗喩ではないか、という、宗教学者・聖書学者たちもいるそうです。

#### 奇態な作風で知られる筒井康隆。

幾度も筆禍事件をおこしたり、表現の自由を守るためと称して断筆宣言をしたり、と何かとお騒がせな SF 作家ですが、この人の、1970 年に書かれた「母子像」という短編は、透明感と哀しみに満ちた不思議な作品です。

子供がアルビノである、ということが最後に明かされるのですが、そこまでの淡々として静かな筆の運びには、この人は世に言われているような差別主義のトンデモ作家というだけではないのでは、と思わせるものがあるように感じられます。当時、アルビノの友人がいたので、尚更私の記憶に残っているのかもしれない。

#### そして、三浦哲郎の「白夜を旅する人々」。

舞台は昭和のはじめの東北の都市、裕福な商家に 6 番目の子供（作者の分身）が生まれるところから物語は始まります。

きょうだいのうち、長女と三女が色素欠乏症であるので、髪も黒く肌も浅黒

い元気な男の子が生まれたことは、家族に安堵をもたらします。

仲の良い、みな心の優しい家族。しかし、5人の兄・姉のうち4人が、若くして自殺や失踪で家から姿を消し、作者の言葉を借りれば「滅んでしまった」のです。

女学校の優等生である次女・れんは、さる皇族のご接待役に選ばれながら、その前日に学校に対して「お上の方から、接待役として不適格であるから控えのものと交替するように、という申し越しがあった」ということで名誉のお役目を解かれます。

れんは「やっぱり、そうな」と明るく受け止めますが、授業で遺伝について学んだことから、すでに外には見せない苦悩に囚われています。

遺伝学・優生学の本を貸してもらおうと知人である女医を訪ねると、そこにあった専門書2冊はすでに他の人間が借りていました。れんの、すぐ上の兄である大学生の章次です。

れんはさりげなく章次に、女医から、貸した本を返して欲しいと言付かったと伝えます。しかし、章次が確かにしまった場所からその2冊の本は掻き消えていました。

本は、長女るいのところにありました。るいは、琴の才能に恵まれ、同じく色素欠乏症の妹・ゆうを連れて稽古場で自立した生活を送っています。髪染めのため長時間湯殿から出てこないるいには何も告げず、章次は黙って本を持ち帰ります。

「白児の遺伝子は一般住民中にもかなり広く分布していて、偶然の結婚から白児が生まれることも少なくない」「世界で最も高い発現率は、パナマのサンプルラスインディアンの1000人中7人。我が国及び諸外国での発生頻度は、おおよそ一万人乃至3万人に一人とされている」という記述を読み返し、章次は鬱屈した思いで本を閉じます。

この、2冊の本が家族の中で密かに巡っていく描写からは、逃れられない宿命に対峙するそれぞれの思いが強く迫ってきます。

「世間って、そんなもんなんだよ、きっと。」ある日、次男の章次は兄・清吾に言います。

「普段は太っ腹らしく見せていながら、いざとなると、やっぱりこだわる。(中略) 騙されちゃいけないんだよね、俺たち。」

## 西洋の北の極のあたりに 白夜とよばれる夜があるといふ

このように始まる文書を遺して、長女あるいは自ら睡眠薬カルモチンで命を絶ちます。

「こんな子が一家に二人は多すぎる。家族にとっても、二人よりも一人の方が守り易い。どうか、何事があっても姉の轍だけは踏まぬように。」

妹・ゆうにそのような思いを寄せて。

次女れんが、私にはこれ以上生きる力がなかった、という遺書を書いて、青函連絡船から身を投げ、あとを追うように長男清吾が消息を絶ってから間もないときのことでした。

雪の中、産婆を乗せて馬橇を走らせる場面で始まったこの私小説は、悲しみで心も体も弱った母親と、ゆう、そして作者自身を映す末っ子の洋吉を章次が湯治場まで送り届けるべく、やはり雪の中を馬橇で疾走する場面で終わります。

彼ら一家に起こった出来事を、旅芝居の一座があくどくも「当世雪女情話」という怪談もどきの芝居に仕立てて途中の村で打っている。

その村を通るとき、母たちにそのことを知られてはならぬので、馬橇はできるだけ早く走らせなければならないのです。

「馬橇の一家は、炭火の乏しくなった手焙火鉢の上に垂れた頭を寄せ集めて、時々霰のように背中を打ってくる雪煙の音を聞きながら、また新しい、白々とした夜を迎えようとしていた。」という文章で物語は終わります。

—————\*★\*—————\*

私の母親は、10万人に1人か2人、という珍しい脳の変性疾患の合併症でなくなりました。

2万人にひとり、ということは、アルビノの方は思いのほか大勢いらっしゃるのだな、と思います。

母を送ったあと、何気なく見ていたアメリカのサイトで、母の病気は低い確度ながら家族性に発現する場合がある、という記述に行きあたりました。

取り越し苦労を笑われることのみを期待して受けた脳の精密検査で、医師から、大脳皮質部分にすでに変性が見られる、と告げられました。

10年前のことです。

これからどうなって行くのかはわかりません。  
が、とりあえず、自分らしく日々を過ごしていけば良いのだろう。  
そのように思っています。

私の3歳下の従妹は、心身に障害があり小人症でもありましたので、一緒に乗り物に乗ったりしたとき、あからさまに嫌悪の感情をぶつけられ、石井さんがおっしゃった、「よくヒトってそういうことするな」という思いを抱かせられたことが幾度もありました。道を歩いていると、一旦私たちを追い越していった家族連れが乗った車が戻ってきて、母親らしき人が窓を開けて子供たちに言いました。「いい子にしていないと、あんなふうになっちゃうのよ」と。

母は病勢が進むと、かわいそうなことに「異形」ともいえる容貌になりました。その姿をしげしげと見ていた自称・母の友人が訳知り顔に「これは、業病ね。業病だわ」と言ったとき、私は、即座にその人を部屋から叩き出しました。

でもまた、これも石井さんが言われたとおり、傷つけるのが人であれば助けてくれるのもまたヒトなのですね。

従妹と母に寄り添うことは、そのまま人の優しさに触れる経験の連続でもありました。

人間とは、人間社会とは、ある種の異端の存在を前にすると、実に複雑な色々な姿を見せるものなのですね。

誰もが、或いは病気で、或いは怪我で、もしかしたら加齢による変化で、今とは違う立ち位置になる可能性を持っています。

そのようなとき、自分らしくあることに信を置いた生を貫きたいものです。  
心を開いて、人の助けを借りて。 石井さんのように。

石井さんの、そして写真に登場するみなさんの輝くような笑顔を拝見して、心からそう思いました。

この出会いに、感謝いたしております。ありがとうございました。